

SHOW HEY シネマルーム

★★★★★

閉ざされた森

配給/ソニー・ピクチャーズエンタテインメント

2003 (平成15) 年9月14日鑑賞

Data

監督 ジョン・マクティアナン

出演: ジョン・トラボルタ/コニー・ニールセン/サミュエル・L・ジャクソン

👁️👁️ みどころ

ハリケーンのさなか、パナマ奥地のジャングルという「閉ざされた森」の中での訓練中におこった鬼軍曹殺害事件。生存者は2人だけ。その尋問に見事な牙えを見せるジョン・トラボルタ。しかし証言は二転、三転。事実関係は混迷を極めていく。この謎解きは至難のわざ。そして最後にはアッと驚くドンデン返し。これぞ謎解きゲームの最高峰、これぞミステリー、と絶賛できるおすすめ作品だ。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

<原題と邦題>

この映画の原題は『BASIC』。

これは基本という意味の他に、本能とか直観という意味がある。ジョン・トラボルタの言う「殺人は人間のベーシック (本能だ)」というセリフからとられたものだが、しつこく事件の真相に迫っていくオズボーン大尉の「直観」の意味もあらわしている。計算し尽くされた「謎解きゲーム」の映画のタイトルとして実にピッタリだ。

他方、邦題の『閉ざされた森』。これは、この映画がアメリカ軍の基地のあるパナマの密林の中で訓練中のレンジャー隊員が消息を絶った事件から連想したもの。外部と遮断され、閉ざされた境遇の中で起こった事件を表現するのにピッタリのタイトルだ。

原題をそのままカタカナ表記してしまう映画が多い今、誉めてやりたい邦題のつけ方だ。

<超一級のみステリー>

パンフレットでは、小説家の有栖川有栖が「翻弄される快感に満ちた映画だ」、また同じく小説家の貫井徳郎が「ここまで見事に騙された経験は、ここ数年では憶えがない。参っ

た、と素直に白旗を揚げる次第である」と表現し、この映画のミステリー性について最大級の賛辞をおくっている。ホンマかいな・・・?と思いつながらも、大いなる期待感の中で映画がスタートした。

最初は、パナマ運河の完成のために、いかに大きな犠牲があったか、というナレーションが入る。それも、「マラリアによる多くの死体の処理が間に合わず、樽に積んで人体実験用のサンプルとして本国に送り返した・・・」という何とも物騒なナレーション。これが一体どのような意味があるのかは、ラストになって明らかになる。

このように、この映画では1つ1つのセリフや言葉のもつ意味が大切。たくさんしゃべられるセリフのうち、どれが意味をもつ言葉なのか、どれが伏線としての言葉なのか、どれがダマシ、ダマされている言葉なのか、ということを考えなければ、この映画の真の面白味は理解できない。

ミステリー映画とはそういうもの。

その「仕掛け」が暗示されていることはわかっているけど、絶対その内容が観客にわからないことは絶対条件。そのうえ、その仕掛けが分かった後も、「なんだそんなことか・・・！」ではなく、「なるほど、そういうことだったのか!」と感心し、納得できるものでなければ一級品のミステリーとはいえない。そしてこの作品は、パンフレットでノンフィクションライターの山口直樹氏が「騙される快感に酔える『BASIC』」と表現しているように、本当によくできている。観客は絶対にダマされるはず。しかも二重、三重に。そしてさらに最後のドンデン返しでは思わずニッコリまたは苦笑い・・・。

<第1の主演ジョン・トラボルタの熱演>

この映画の第1の主演は、元レンジャー隊員でありながら除隊し、今は麻薬取締局捜査官となっているハーディを演じるジョン・トラボルタ。1977年の『サタデー・ナイト・フィーバー』で文字通りフィーバーしたものの、その後パツとしなかった俳優。しかし90年代は見事に復活し、最近『フェイス/オフ』(1997年)、『將軍の娘/エリザベス・キャンベル』(1999年)、『ソードフィッシュ』(2001年)などで主演し、渋い演技を見せている。

もっとも、彼は最近麻薬組織に買収された容疑を受けて、待機処分中という身。しかし超一級の「尋問技術」を見込まれ、パナマの米軍、クレイトン基地の責任者のスタイルズ大佐に呼ばれ、「閉ざされた森」から生還した2人の兵士の尋問を担当することになった。

その「尋問の技術」は拔群。アメリカ映画に出てくる弁護士は、法廷での尋問技術を「見せモノ」にできるヤツが多いし、陪審員に向けて行う弁論にも心打つものが多い。現実のアメリカの法廷のすべてがそうではないだろうが、やはり陪審員制度のもとでは、「しゃべる」能力が大きな価値をもっている。しかし日本ではどうか・・・?

日本の法廷の証人尋問では、尋問の技術に惚れ惚れすることなど、めったにない。その

多くはダラダラとした言葉の羅列だし、尋問によってポイントを奪うことを目指したものではない。従って、丁々発止のやりとりなどもめったにない。だから面白くないし、多くの弁護士が尋問の技術を磨く努力もしていない。こんな日本の弁護士から見れば、このハーディの尋問技術は1つの理想的な教材となるものだ。尋問のテクニックの一つは相手の心を読むこと。〇〇と尋問すれば△△と考える。なぜなら相手は××と考えているから。これをいかに論理的にしかもデータにもとづいて正しく予測するかが、勝負なのだ。そしてこれは勝負の世界では何でも同じ。野球におけるピッチャーとバッターの勝負も同じ。

私の大好きな将棋の勝負も同じだ。将棋でいう「三手の読み」というのが、すべての勝負ごとの基本（BASIC）だ・・・。

<第2の主演コニー・ニールセンの役割>

第2の主演は、スタイルズ大佐の部下で、生還した2人の兵士を最初に尋問した女性士官のオズボーン大尉を演ずるコニー・ニールセン。彼女はこの「謎解き」、「ミステリー」映画のいわば「ガイド役」だ。『グラディエーター』（2000年）で大抜擢を受け、最近では「ハンテッド」（2003年）で、この映画の役と同じようなFBI捜査官を演じている。

オズボーン大尉は、自分の任務である尋問の役目をハーディに取られて面白くない。そのため上司のスタイルズ大佐にさかんに文句を言うがダメ。しかし「この仕事を私にやらせず、民間人のハーディにやらせるのは何かありそう・・・？」と思う彼女の直感力（BASIC）はすごいもの。そしてホントに何かがあった・・・。

この映画では「謎解きミステリー」に徹しているから、彼女の美しさや、セクシーさを見せるシーンは全くなく、ハーディとのちょっとした会話の中であられるだけだ。ちょっとした「色気シーン」があったらよかったのに・・・と思うのは、私の例のスケベおやじ根性か・・・？

<第3の主演は鬼軍曹のサミュエル・L・ジャクソン>

ジョン・トラボルタとコニー・ニールセンが捜査する側の主演なら、「閉ざされた森」の中で、殺すか殺されるかの「当事者」としての役割を演ずるのは、ウエスト軍曹。

そしてこのウエスト軍曹に扮するのは、数々の演技賞に輝くサミュエル・L・ジャクソン。最近の作品『S. W. A. T.』でも主演を演じており、その存在感は抜群。ストーリーのなかでは、ウエストは鬼軍曹。職務に忠実な鬼軍曹だけならまだしも、今回訓練を受けるレンジャー隊員の一人である黒人のバイクに対する「しごき」は「いじめ」そのもの。ウエスト軍曹とはこんな陰険な、イヤな奴だったか、というイメージを徹底的に植えつけている。しかし、実は・・・。

この『閉ざされた森』という映画に、内容に則して別のタイトルをつければ、「閉ざされ

た森の中でのウエスト鬼軍曹殺害事件の真相暴き」ということだから、ウエスト軍曹は訓練中レンジャー隊員のうちの誰かの手によって「殺害」されてしまう。

たしかにあのイヤらしい「いじめ」を続けていけば、誰かに恨まれ、殺されても当然だろう・・・と思うが、途中であえなく殺されてしまうと、ちょっと待ってよ、これで本当にいいのかな・・・と思ってしまう。

主役のサミュエル・L・ジャクソンがこんな風にストーリーの途中であっけなく死んでしまっただけ・・・？という疑問は誰もが持つはず。そして、その疑問は正しいものだった。ウエスト軍曹はやはり・・・。

<名前と顔を覚えにくいのが難点・・・？>

私は日本人。だから日本人の名前と顔ならすぐに一致する。一目見ればすぐに分かる。しかし、外国人はどうしても名前と顔が覚えにくい。

今、公開中の『サハラに舞う羽根』、『名もなきアフリカの地で』の映画評論にも書いたが、顔のメイクを変えたり、服装を変えたりすると、外国人の場合、なかなか分かりにくくなってしまう。

この映画に出てくるレンジャー隊員のうち、生き残ったのがダンバーとケンドルの2人。そして「死亡」したのがミュラー、カストロ、ニュニズ（女性兵士）、パイク（黒人）の4人そしてウエスト軍曹。

軍曹を含めた、この合計7人のレンジャー部隊の隊員がハリケーンが吹き荒れる密林の中で繰り広げた「殺し合いゲーム」の実態が、ダンバーとケンドルの証言内容によってクルクルと変わってくる。真実は一つのはず。しかし、真実を明らかにすることはそれほど簡単で単純な作業ではない・・・。

この謎解きスリラーを一種の知的ゲームと割り切って、真剣に観ていると、本当に面白い。もっとも絶対に勝てることはないと思うが・・・。

ただ、日本人の私にとってやっかいなのは、メーキャップをした兵士たちの名前と顔がすぐに一致しないこと。このハンディキャップはいかんともしがたい。頭の中はクルクルとフル回転しているつもりで、あのAはどこで何をしていたか・・・？あのBはどうだったか・・・？と一つ一つ考えていると、物語はすでに先に進んでいるため、頭が追いつかない・・・。そんなことの繰り返しの中、細かいストーリーがだんだん分からなくなってくる・・・。多分、多くの観客もそうだろうと思う。

しかし、それでもこの「謎解き ミステリーゲーム」は、久しぶりに「知的興奮」をよびおこしてくれた作品。本当に面白い映画だ。

<総評>

この映画は観客が約半分は入っていたから、それなりに事前の宣伝効果があったのだから

うと思う。しかし、日本の観客のレベルでは爆発的な人気作にはならないだろう。日本の観客が好むのは『マトリックス』や『ターミネーターⅢ』そして『座頭市』などマスコミがもてはやすものが多く、自分の目や自分の感性で本当に素晴らしいと思うものを選んでいるとは思えない。「マスコミ主導で、乗せられやすい日本人！」としか私には思えないわけだ。

従って、この映画のような、知的ゲーム、謎解きミステリーを真剣に考える楽しさを味わうためには、観客そのものがもう少し「利口」になる必要があると思う。

しかし、残念ながら今の日本では急にそうなることは無理だろう。従ってこの映画は、ある程度の評価は得られてもホドホドの人気ということになると思うが、私としてはこの映画を、小説家の有栖川有栖氏や貫井徳郎氏がパンフレットで絶賛しているように、高く評価したい。

それも、「面白かったなあ」というだけで終わらず、きちんとすべての事実関係を解明し、ちゃんとした種明かしができるまで、この映画を分析、解剖してもらいたいものだ。

2003（平成15）年9月16日記